

写真1. 導入舎



写真2. オールアウトにより換気扇も含めて建物全体を洗浄



写真3. 洗浄後の豚房



事故が発生した際、投薬により被害を最小限に抑える事は重要である。しかし今回紹介した事例のように、何よりもまず「衛生的にきれいな環境で豚を飼う」事が最も重要であり、その基本をおさなりのした状況で抗生剤やワクチンを使用しても付け焼き刃になってしまうかもしれない。

全てを完璧にする事は難しいかもしれないが、少しでもきれいな環境で豚を飼養できるように関係者全員で知恵を出し合い、できる事から始めていただけたらと思う。

衛生的な環境を心がける

すると、オールアウトを開始した次のロットから、死亡事故はパタリとなくなった。死亡事故だけでなく、呼吸器症状を呈する豚もほとんどいなくなり、グレースー病も抗体検査で高い値を示す豚が認められなくなった(表1)。現在は、事故がなくなつて以降の導入豚が稼働し始めており、肉豚の産子数や事故率も改善している。

表1. 事故多発時とオールアウト開始後のグレースー病の抗体価

グレースー病/CF*	128以上	64	32	16	8	4	4未満
事故多発時(頭)	5	23	11	1			
オールアウト開始後(頭)				3	8	6	18

※ CF: 補体結合反応。抗体検査の一種。結果は2の倍数で示され、発症豚では64倍以上を示す事が多い

図1. 導入豚の受入スケジュール (PRRS 侵入前)



図2. 導入豚の受入スケジュール (PRRS 侵入直後)

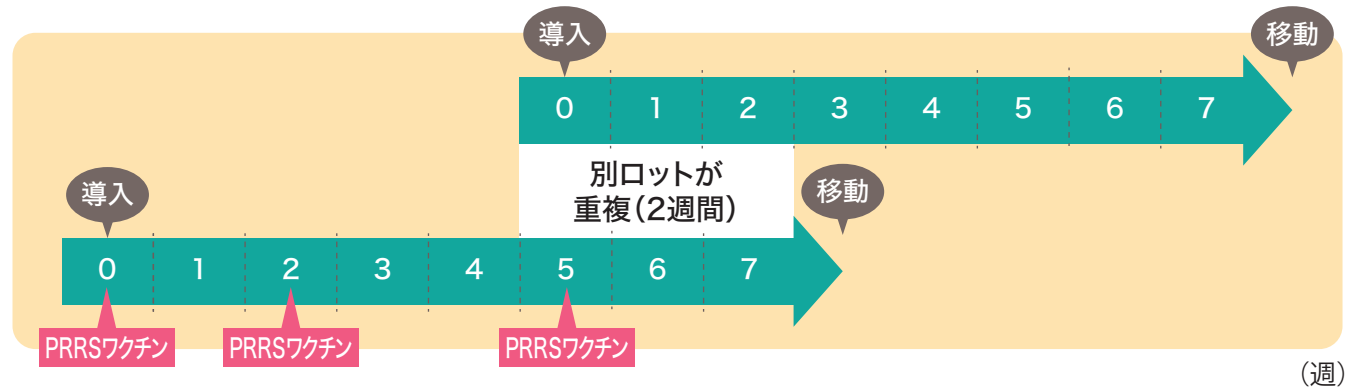
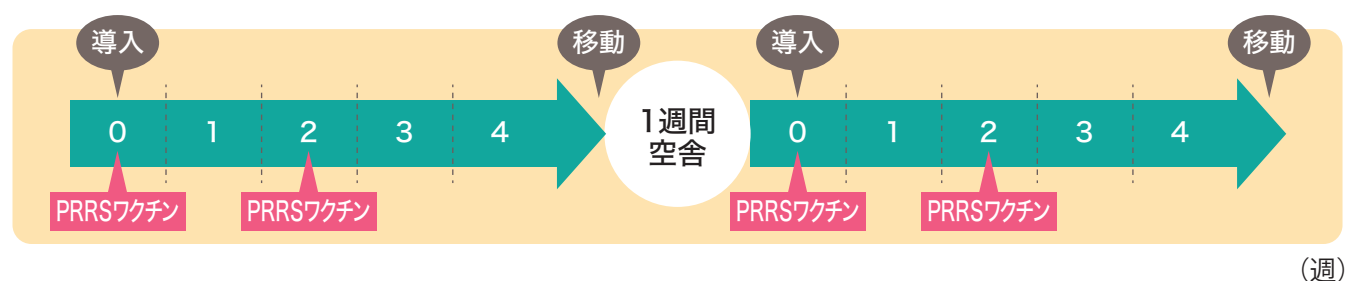


図3. 導入豚の受入スケジュール (導入舎事故発生後)



衛生環境を最優先に 豚舎の洗浄消毒の重要性

養豚の現場では、「養豚は畜舎の洗浄・消毒が9割」といわれる事がある。洗浄消毒の重要性を改めて実感していただくために、導入舎のオールアウト洗浄により成績が改善した事例を紹介する。



導入舎での事故多発

今回紹介する農場は、導入舎(写真1)、繁殖舎、肥育舎が完全に独立した、ウインドウレスの養豚場だ。種豚候補豚は約7カ月齢で5週ごとに導入しており、導入舎で隔離飼育してから繁殖舎に繰り入れていた。かつてはPRRS(豚繁殖・呼吸障害症候群)陰性の農場であったが、ある時PRRSが侵入。導入舎でPRRSのワクチン接種を済ませてから繰り入れるようにした。

繰り入れ時期はワクチン接種後の血清検査により、抗体陽性かつPCR陰性の状態を確認したうえで決定する事にした。ワクチンプログラムの変更により、繰り入れのスケジュールを変更する必要が生じ、導入舎の空舎期間を確保する事ができなくなつてしまった(図1、2)。

このプログラムに変更してしばらくは大きな事故はなかったが、2年ほど経過した頃から導入舎での事故が増え始めた。事故が多発したロットで抗体検査を実施したところ、グレースー病による事故と考えられ、その事故は1ロットでは収まらず、その後も続発。具体的には、導入した候補豚の半数以上が呼吸器症状を呈し、悪い時には導入した豚の5〜7%が死亡するという状況であった。

抗生剤の飲水添加を開始

これまで、さまざまな関係機関と協力してPRRSの対策を行い、グレースー病発生当時も

「PRRS対策が最優先事項」と位置づけて対応していた。そのため、ワクチンプログラムは変更せずに、飲水添加設備を導入して、導入後のグレースー病を抗生剤の添加で抑え込もうと試みた。飲水設備を導入して3カ月程度は事故が減り良好だったが、その後事故率が再度増加し始めた。

ワクチンプログラムの変更と畜舎のオールアウト洗浄を開始

結果的に、抗生剤の飲水添加でも導入舎での事故は収める事ができなかった。そこで基本に立ち返り、導入舎のオールアウトができないか生産者や関係機関と検討をした。

この時期、定期的に行っている衛生検査ではPRRSの野外ウイルスが検出されず、繁殖成績も向上していた。そのため、それまで行っていた導入候補豚へのPRRSワクチンの接種を3回から2回に変更し、再度血清検査により抗体陽性かつPCR陰性である事を確認したうえで、導入後4週間で繰り入れを行う事にした(図3)。これによって、1週間程度ではあるが、導入舎をオールアウトする期間を確保できるようになった。

オールアウト洗浄後、成績は劇的に改善

洗浄・消毒は、空舎の間に水洗を2〜3日、水洗後乾燥を2日、グルタルアルデヒドによる発泡消毒を1日、消毒後乾燥を2日設けた(写真2、3)。す